
魔法使いサスケと 空をおよぐ金魚
まごひげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いサスケと

空をおよべ金魚

【Zコード】

N1582E

【作者名】

まいひげ

【あらすじ】

サスケは魔界のどの魔法使いとも違った不思議な魔法使いだった。そのせいで実験材料にされ、身体を蝕まれてしまふのだった。実験室に乗り込んだ麻美らはサスケを助けようとするのだが・・・。

新たな展開

「入学か・・・なんか複雑・・・」

少女は、入学プリントをビスケットを食べながらまじまじと見つめていた。

少女の名前は吉田 麻美、今日の深夜12時に魔法界にある学校に入学することになつている。

「あと、30分、」

壁にかかっている時計をプリントと照らし合せた。

ジョイス魔学校、

「緊張する、」

一言呟くとイスを鳴らした。

コンコン・・・

「入つてもいい?」

明るく弾んだ女性の声が鳴った。

「うんいこよママ

ガチャリとドアノブが半回転すると黒いワンピースにひとめわ田立つパールのネックレス

と緑のイヤリングをした女性が立っていた。

「麻美、支度は出来た?」

「うん」

紺色のブレザーにパリッとしたしわの伸びたカッターシャツ赤いリボンとスカートはジョイス魔学学校の制服だ。

「どう?」

「制服でしょ? よく似合っているわよ」

「そう? ありがとうママ」

麻美は、はにかんで顔を赤らめた。

「麻美そろそろ」

「あつほんと! 行かなくちや」

午後11：50分

「でつでも私学校までどうやって行くか知らないよ?」

「大丈夫よ案内してくれる子が来てくれているから」

「えつ?」

麻美は魔界に今日、初めて訪れる。

もちろん麻美に魔界に知り合いはない。

「それと、、、」

マリ（麻美の母）は右手の一指し指をヒョイと動かすと瞬間的に左手に赤い水筒が出てきた。

「これを持って行つてちょうだい

「何が入つていいの？」

「何も入つていないわ、空っぽよ

「？？」「

不思議に思った。

基本的に水筒つて何らかの飲み物を入れる道具のはず、、
なのに何にも入つていないと、
しかもあの水筒は私のじゃない、ママのだ、
飲み物を入れる目的じゃない、他の目的があるのか？

そうこうしている間にマリは麻美のバッグに水筒を詰め込んだ

「よろしくね

マリは超越者とも呼ばれる魔術師だった。

魔術師の子供ということだけあって麻美はマリの後継者にならべく
この魔術を学べる学校に
入学することになったのだった。

人間界とは別の世界に、、、

「ママ、案内して貰れる子って誰なの？」

「向こうの子よ」

「魔界の？」

「もうよ、でも大丈夫ママがちゃんと頼んでおいたから、ママは今日実験があるから入学式には出られないけど、」

「うそ」

11：55分

「やせつ 時間よ行きなさい」

「うそ行つてきます」

麻美は真新しい革靴をはくとドアノブに手をやつた。
ガチャリと回すと透明かりがキラリと差し込んだ。

「いい旅立ち日和ね、満月だわ」

「じゃ行つてきます」

家の外へ飛び出すと自然に扉の閉まる音を聞いてから歩き始めた。

バッグを肩にかけて道路に出ると見慣れない少年が家の隣にもたれていた。

「やつと出てきた、」
フワリと夜風が吹いた。

乱れた髪を手で直しながら少年を見た。
乱れてもそのままのくしゃくしゃのキャラメル色の髪
艶やかな赤い目は季節はずれの真っ黒のコートのおかげで目立った。
背中には身の丈ほどある布の包みを背負っていた。

「じゃ僕の後ついできて」

少年は麻美の前をゆっくり歩き始めた。
それに習つかのように麻美もその後をついて行く

「君が案内人？」

「そう」

「名前は？」

「SASKE／1500」

「それ名前？」

「一応」

「ふーん」

「でも長いからサスケでいいよ」

「サスケ、分かった」

麻美より背の高いサスケは歩幅も大きいので麻美は小走りになつていた。

しばらく歩くとサスケは唐突に立ち止まつた。

「うー」

「魔界の入り口ここ?」

「そう」

見渡す限り住宅地で自分たちの立つているところがそのままのど真ん中なのだつた。

「どこから入るの?なんにもないじゃん」

そんな麻美を横目にサスケは黙々と作業を進めていた。内ポケットから使いかけのチョークを取り出した。

「チョーク?」

麻美が言つても知らん顔をして足元にあるマンホールに何かを書き始めた。

かなりいりこんだ模様がどんどん出来ていく。

チョークを持った手を止めることなくサラサラとサスケは書き進めを行つた。

「よし、出来た」

全体を見ると出来上がつたその絵は怪獣の形として見て取れた。

満足そうにサスケはニタリと笑うと右手をマンホールにポンと乗せ

た。

目を閉じるとマンホールからまばゆい光が輝き始めた。

現在時刻 12時

当然深夜なので辺りは暗い

「よし」

サスケは閉じた目をうつすら開きマンホールの上から手を引いた。同時に光は吸い込まれるように消えた

「入って」

サスケはマンホールのふたを取つて麻美に中に入るよう促した。

すると向こうのまづから声が聞こえてきた。

「麻美……！」

「ママ……！」

左手に何かを持つている。

「どうしたの？ママ

ハアハア、、、息を切らしながらマリは麻美たちに追いついた。

「ハアハア、、、麻美！忘れ物よほい学生服

「あああつつ……ほんとだ……ありがとウマ

「いいのよ、それよつまく案内してもらひてね?」

「うん!…とつてもいい人なんだよ」

「よかつたわね」

「うんサスケくんつて言つの、 、 、 」

サスケを見るとサスケはブルブルふるえていた。
固まつて動こうとしない。

「サスケ?…どうしたの?」

「ああ そうかサスケ君は、 、 、 」
マリは笑いながらサスケを見た。

「サスケ?… 、 、 」

「すつすいません」

「マリにやつと言えた一言だつた。

あいかわらずブルブルふるえていた。

「麻美をよろしくね」

「りよ了解です、 、 、 」

「じゃママ帰るからね」

「うんありがと」

次の瞬間もつとまらないなかつた。

「よべこなしあれた魔法の使い方をするなあママは、学生証は

「お元気の、」

「えつ？」

サスケは顔色を黒くしていつひきついた。

「ママはおれ物を持つてへるふうをしたのよサスケにね」「お

「・・・」

サスケは何も言わなかつた。

「ママは向をたぐひんでいるの?..?」

「時間、 、 、 」

サスケが言った。

「そうだね。ゴメン時間といちやつて、 、 、 」

「いこよ。別に、 、 」

そう言ひとサスケは黙つたままスルスルとマンホールの中へ入つて
いった。

麻美もサスケに続く。

カンカン、

粗末な階段を真つ黒な底を見ながらゆづくつと下りていく。

トーン、

底に着くと水の流れる音がしたと同時に鼻を刺すような臭いが襲う。
麻美はとっさに鼻をつまんだ。

「クサッ！ 」

サスケは何も気にせず、つむぎだらけのパートのポケットから小さなメモを取り出した。

メモと自分の腕時計とを見合せながら「 いこよ、 と真つ暗な方
を指さしていった。

サスケはやたら時間を気にしているようだ。

指をさしたほうに歩いて行くがずっと時計を見ている。

「それにしても臭いなあ。サスケは臭くないの？」

「臭くない、」
静かに言った。

「ふーん」鼻をつまみながら呟つ。

水の流れている溝のすぐそばを歩いていく。
溝にはジュークの空き缶やコンビニのビニール袋がちらばつっていた。
二人は、冷たいコンクリートの壁を手で触りながら黙ってしなく続く
暗いトンネルを行った。

サスケのブーツが地面にあたるたびにコンコンと辺りに鳴り響いた。

「うーん、」

まだ、続くはずのトンネルの途中サスケはパントマイムをするかの
みで四回手で何かを触っている。四角い扉のよつな、、

「開けて」サスケが麻美に言った。

「どうやって開けるの？」

「手で押して、開くから」

「うそ」

麻美はサスケの言つようつて 扉 のよつなものを軽く押した。

するとい、触つてゐる壁がフウツと消えまばゆい光が目を覆つた。

「まふしー！」

とつたに田を手で押さえた。

ふいに後ろを向くとトンネルは跡形も無く消えていた。

「じゃあついてきて」

サスケはいつの間にか麻美の前を歩いていた。

「こつの間に、」

足元を見ると赤、黄、青と色とつぢりのお花畠の中にいた。

それは、カラリと朝の田差しとさわやかな空と風、ビームでも続く花畠だった。

しかし、このさわやかな空はビームでも続かない。向こうのほうに小さく見えている闇色。

鈍色の空と空に大きな黒い建物が浮かんでいる。

「サスケ、あの向こうに浮かんでいる黒い建物はなに？」

「えつあああれかあれは、センネンロウガク千年牢獄」

「千年牢獄？ つて何をするところ？」

「・・・・」

サスケはそれ以上何も言わなかつた。

ビームでも続くこの花畠を歩く」と一五分

歩きながらサスケは、つせはせだらけの「パートのポケットから小さな四角い箱を取り出した。

「マッチ？」

その通りだった。

スライド式の箱から赤いマッチ棒を数本の中から一本を取り出すとそのままスウとしゃがみ込んだ。

「どうしたの？」

心配そうに麻美はサスケの元へかけ寄る。

「まあみてて」

サスケはマッチ棒を箱の横でシコツとするとハヤウと音を立てて赤い炎が立ち上った。

火が消えないように手を添える。

墨色の手袋の内側がボウと赤く染まつた。

「マッチの火きれいだね」

中腰でマッチの火を見つめて言つとサスケもこっちを向いてにっこり微笑んだ。

再びマッチの方へ視線を移すと添えた手に力を込め始めた。

目を閉じるとマッチ棒は消えマッチの炎は大きくなつた。

「すーじー」

宙に浮いた炎はサスケの手の中で静止している。

サスケはその炎を花畠に静かに下ろすとその部分の草花は灰と化し

その代わりに草花で隠れていた大きな丸い鉄板が見えた。

「マンホールだ、」

サスケは静かに田を開けるとさくそくの火を消すように炎は消えた。

「今のは、なんて魔法?」

「炎上つて言つてね、火を操る魔法さ」

「ふーん・・すごいねサスケは」

「何が?」

「自慢しないもん」

「何の自慢?」

「魔法の。」

「・・・・・」

「魔法に限らず人間界では、他人に無いものを自分が持つていたら
大いに自慢するのよ

私もあるののような力があつたらきっと自慢してしまつと想つわ」

麻美はわざとサスケと視線をはずして答えた。

「おもしろいね」

「？？？」

麻美はサスケのほうを見る。

「君たちの事さ、人間の自慢したがる、そんな感情は僕にはないからね」

サスケはにつこり笑つた。

「そうかもね」

ふわりとあたたかい春の風が吹いた。

魔界の秘密と縁の少女（前書き）

今回は新しいキャラが登場します。
感想や意見アドバイスがあれば書いてほしいです。
楽しく書きました。
楽しく読んでやってください。

魔界の秘密と縁の少女

サスケは、茶色のマンホールのふたをガラリと開けた。
マンホールの中をサスケはのぞき込んでいる。
かなり真剣に・・・・

麻美はそんなサスケの姿を見てまねした。
「深いの？」中の暗さで麻美は、言った。

「2メートルぐらいかな」
サスケはそう言いながらスルスルと階段を下りていく。
サスケに「やめよ！」と言えずついて行くことになった。

しばらく歩くと水の流れる音が聞こえてきた。

悪臭はまったく無かつたので麻美はちょっとびりほつとした。

下まで降りるとサスケはポケットからマッチを取り出して麻美に差し出した。

「これ、ありがとうマリ様によろしく言つとこで」
麻美にマッチを渡した。

「何これ、ねえサスケ」

視線を変えると、

「おーーい吉田どーに向いてんだ？！ 先生の話きけよ～～」
甲高い声で叫ぶ声が教室中に響いた。

すると教室にいる麻美と同年代の生徒の視線が一斉に麻美を指した。

「スミマセン、 、 、 」

教科書を配っていた最中だつたらしく先生は教科書の束を持つていた。

麻美は赤くほてつた顔を教科書で隠した。

教科書は数学、英語の基本教科の他に魔学、魔学歴と書かれた教科書があった。

「私いつの間に教室に来たんだろう、 、 、 」

時計を見ると深夜の2時をまわっていた。

「でも、なんでか入学式に出た記憶がぼんやりあるんだよね。 。

さつきまでサスケといったのは夢だつたのかなあ

」

「マッチ。 これサスケがくれたやつ、 、 、 」

「あれ? ? 」

マッチのラベルを見ると見覚えのある柄が書いてあるのに気がついた。

マッチ箱の色は赤、 、 、

見覚えのある柄、 、 、 、

「もしかして・ 、 、 」

あのとき、サスケがこの見覚えの無いマッチを麻美に返した理由が分かつた。

「まさか・ 、 、 」

自分の推理を証明する為に机の横にかけてあるバッグに手を入れた。

「やっぱりね。水筒がないわ

」

こいつがママに聞いた事がある。

ある物Aをまったく違つてある物Bに変えるまたはべつの術に変える

特殊魔法

その名を「変換」サスケはこの魔法が使えるんだ。

事実、マリはサスケが「変換」を使える事を知つていたのだ。

あらかじめ2人は連絡を取り合ひマリは「変換」を使うときは麻美に持たせた赤い水筒を

使うように命じていたのだった。

「で、ママはサスケに向うかの目的で絶対「変換」を使わせたかったのね

ママはサスケに「変換」を使わせる為に入学式の時間をわざと遅らせてサスケと私に伝えた

本当の式の時間が分かつたときにはもう始まっていた。

だから、サスケは「変換」を使って「炎上」を演術し1時間巻き戻つた世界にマンホールを通してしまったのね

「そういえばいつか本で見た事がある・・

何に「変換」するかで能力の大小が決まるって・・

「変換」は能力の大小を見るために病院や試験で幅広く使われている魔法だつて・・

「もし、それが本当ならばママはサスケの能力の大きさ、つまり強さが見たかった・・

そういうことになる、、

でも能力の大小を決める基準が分からぬ。」

頭を抱えて考え込んでいると麻美の後ろの席の少女が声をかけてきた。

「ここにちわ、私ナギつて書つの、あなたは麻美さんでしょ？よろしくね」

「うん

麻美は「はつ」とわれにかえると
「いらっしゃ、よろしくね」

そう言った。

いつの間にかチャイムは鳴つたらしく教室はにぎやかになつていた。

「そういうえば、よく私の名前分かつたね・・なんで？」
初対面なのに麻美の名前を知つていたナギに疑問を抱いた。

「えつ？！しつてますよ」うちの世界じゃ有名ですもん
もちろんあなたのお母さん、マリさんですけどね」

「ママつていうちの世界でそんなに有名人なの？」

「有名も有名マリさんを知らない人はいないですからね！マリさんに憧れてこの学校に入学する生徒も実際多いんですよ」

「ママつてそんなにすごい人だつたんだ・・・」

「そういうえば入学式から麻美さん「ボー」としていたみたいだったけど大丈夫ですか？」

「えつああ大丈夫。少し眠いだけ
あぐびが出た。

「麻美さんつて人間界から来たんでしょう？どうやってここまできた
んですか？」

「せりええっとああ・・・」

ひとまずこの場ではサスケの名前はふせよひと黙った。

また、話がややこしくなるから。

「とつ友達と来た。」

「やうなんだ。」

「うんそーアハハハハ

これが終わったら図書館に行いつ、「変換」に関するあの時読んだ本を見つけに行いつ。

そう思った。

その後の授業は終わり放課になると教室は死んだように静まり返つた。

「私も帰えるつと

ナギはスクールバッグを肩にかけながら言いつ。

「ねえ麻美さんも一緒に帰らない?」

下を向いていた麻美の顔をのぞき込むよつにして尋ねた。

「ゴメン、私寄り道するから」

「そつか、じゃまた今度ね。」

「うんゴメンねバイバイ

「バイバイ

ナギがそう言いつとスタッフと教室を出て行つた。

「私も帰えろつと。」そこから一番近い図書館は・・・ハリー図書館ね

メモを見ながら言つ。

木製の階段をギシギシ言わせながらおりて校門前まで来ると段差があるのに気がつかず

転んでしまった。

「痛つっ！！」

転んだ拍子にひざをすりむいてしまった。

「つつつつーー！」

足を押さえしゃがみ込んだ。
きりきりと痛む

すると後ろからきれいな声が響いた。

「大丈夫？ケガ」

振り向くとそこには緑色の髪をおさげにくくり妖精のような服を着た女の子が立っていた。

「ええつああ大丈夫、大丈夫！！すりむいただけだから

女の子は麻美の声を無視してケガしたところをまじまじとみつめていた。

「私 緑リョクつて言うの。あなたは？」

緑と名乗る女の子は麻美がすりむいたところを手で優しくなぞつた。

「大丈夫ーこれくらいなら治せる」

すると、なぞつたところが一瞬緑色に光つた。

「はーー治つたよ」

緑はにっこり笑うと麻美はポカンとしたまま傷口に目をやつた。

「治つてゐる。すうい！」

何もなかつたかのように傷口は完治していた。

「ありがとう、でも傷や病氣を治したりする魔法は禁止魔法で使えないはずじゃ・・・」

「これくらい大丈夫よ」

「そつか、ありがとう、私麻美よろしく」

お礼を言つと縁ははにかんだ笑顔を見せた。

「なにかお礼がしたいなあ。。ねえ縁、私に出来る事ない？」

すりむいたところをポンポンとたたきながら言つた。

「私、人探しているんだけど・・・」

「誰？名前分かる？」

「サスケって言つの。ずっと探してゐるんだけど見つからなくて・・・
知らない？」

「サスケ・・・」

麻美はこれからサスケのことで図書館へ行く。調べ物は一人でした
がる性格だったので話がややこしくなるかもしれないかもしない
とためらつた。

「知らない」

結果、嘘をついてしまつた。

「そう？」

縁は麻美の目の前で手をかざすと瞬時にこいつ言つた。

「あなたはサスケを知つてゐるわね？」

「え？…」

「私を甘く見ないほうがここと思ひよ」

「じつにまつわった…」

「あら、 もうなまづいてるはずなの」

「？？」

「心読んじゃったの？」

「ああそれで、」

「ねつ知つているんでしょ？・サスケの事？」

「ええまあ、学校に来る時案内役として私と一緒に来たよ

「やひ、じゃあ実験は終わったんだ…」

「実験？」

「えつああこいつの話、なんでもない。それより麻美つてこれからサスケの事で図書館に行くのね」

「えつなんで？」

「私「読心」が使えるの。ゴメンね勝手に…」

「読心って心を読むって言う魔法のこと？」

「やうよ

「縁も魔術師なの？」

「やうよ、私も図書館行っていい？色々聞きたいしさ

麻美はサスケの事やこの世界のことを色々教えてもらいたいと思いつつ、縁にへりを出した。

「ありがと」

縁が言つと若葉色のきれいな葉っぱが舞つた。

魔術師メイリーンとカラー・ボトル

「私、この世界の事良く知らないんだ。緑ちゃん色々教えてね」

「いいよ」

校門を出ると赤きながら緑はこの世界の事を話し始めた。

「かつてこの国はひとつだった。かつて2つの国に境界はなかつた」

「それはどうこう」と…

麻美が尋ねる。

「伝説の魔術師メイリーンの命ゼリフよ

この魔法界には白界と黒界の2つが入り混じった世界ですね。でも、かつてはこの国に境界はなく仲良い世界だったの。」

「きつかけは？？・境界が2つになつたきつかけは？」

麻美が聞いた。

すると、しばらく間をおいてから緑がしゃべり始めた。

「カラー・ボトルよ」

「カラー・ボトル？？何？それ」

「この世界に1つだけあるどんな願いをも叶えてしまふ魔法のボトル」

「魔法のボトル・・・」

「私もおばあちゃんから聞いて知ってるんだけど
そのカラー ボトルの中には大きな赤い金魚が入ってるんだって。
。」

「金魚?」

「やっぱ、当時の世界でけんかになつたもとはそのカラー ボトルな
の」

「願いを叶えてもらおうとしたの?」

「いいえ。田的是中に入つて いる金魚よ。
この金魚のウロコを煎じて飲むと不老不死の体が手に入ると言
われて いるらしいわ」

「不老不死・・・」

「で、カラー ボトルをめぐつて戦争が始まつた。
そして今も。。」

「そつか、ここに来たとき見たあの灰色の空があつたのは黒界だつ
たのね。」

「多分 そうね。今いる白界は一年中春の天氣と青い空が広がつてい
るけど

「黒界は一年中寒くて真っ暗な世界だからね」

「そつか、だからサスケはコートを着ていたんだ。」

そう、話し合っている間にハリー図書館に着いた。
ゴシック様式のレンガ造りの建物でかなり古そうだ。

真っ白のきれいな階段を上つていくと玄関先に「ようこそ」と書かれたプレートが置いてあった。

中に入ると天井近くまで本が揃えてあり本棚のいたるところに脚立が寄せてあつた。

「大きな図書館だね」

麻美が言うと重ねるように縁が言つた。

「私立図書館だからね。私も初めて来たわ」
あまりの大きさにアゼンと立ち尽くす2人。

麻美の肩にかけたバッグがづり落ちると2人ともスイッチが入つた
ように中に入る。

「いつ行こうか・・・」
縁が言つた。

「それより麻美はサスケの何を調べようとしているの？」
縁が聞く。

「サスケの能力の大きさが知りたいの」
耳元で小声で言つた。

「能力の大きさ？」

縁が麻美を見て聞きました。

「ええ、魔力の大きさを調べるには魔術を使つ」ことが最もとされていふことは知つてゐるよね？」

「変換でしょ？」

「そう、あの時サスケは私の赤い水筒を使って演術したの」

「何に？」

「マッシュよ」

麻美は縁にこの世界に来たときの事、マンホールに入つたときの事、サスケがマリに怯えていたことなど全て話した。

「そんな事があつたんだ、」

2人は変換について調べる事にした。

背丈の3倍ほどある大きな本棚にもたれてぶ厚いホコリだらけの本を開いて「変換」について

調べていると小さなかすれ声で縁が言った。

「あつたー」れじやない？！「変換」の演術条件つて書いてあるー！

「！」

「どれどれ・・・」

麻美は横から盗み見すると縁は麻美を気遣い小さな声で本を読み始めた。

マリのたぐらみと呪術実験

「変換はあるものをまったく違う別のものに変える術である。しかし、魔力が高い場合あるものを広大な魔法エネルギーに変えることが出来るが

基本的に魔法エネルギーに変えられる魔力を持つものは『黒魔術師』のみである。

変換について書かれているのはここで途絶えているわ」

「私がこここの花畑にいる時もう入学式が始まっていた。
もう、時間がなかつたんだわ・・・」

「何を言いたいの？」

縁は不思議そうに麻美に問う。

「私なら変換を使って学校までテレポート（瞬間移動）をつかうわ、
だって入学式に
間に合わないかもしれないんだもの。
だけど、サスケはその力を使わなかつた・・・なぜだか分かる?
?」

しばらく沈黙が続いた。。

そして、縁が言った。

「サスケは黒魔術師だから『変換』を使って魔法エネルギーに変えられたはず・・・
だけどそれをしなかつた・・・テレポートするだけの魔力がなかつたって事?」

「そう、黒魔術師なのに魔力が小さいだなんて普通じゃ考えられない事なんでしょう？」

「確かに。黒魔術師はもともと私たち白魔術師と違つてケタ違いの魔力の持ち主よ。

テレビポートぐらに朝飯前のはず。。なのにサスケは・・・

「誰かに魔力を吸い取られた。。。って考えにたどり着く結果になるね」

麻美が呟つ。

「やうとしか考えられないね」

「少なかいすママまむつ」の事を知つていいと頷く。

「えつー？だつたらサスケが危ないわーー！」

「どういふ事？」

言いながら図書館を飛び出した。

「ねえーどうしたの？こんなに急いで。」

麻美はかかとを踏んだ革靴を履きなおしながら呟つ。

「サスケはずつと前から実験材料としてやがてまな実験が行われているの」

「実験？？・・」

「麻美のお母さんつまりマリをリーダーとする実験グループは黒魔術師の広大な魔力の実験と研究から始めたらしいわ。その実験台として使われているのがサスケなの……そして今は『呪術』と呼ばれる呪いをかける実験が施されていると聞いたわ。」

「呪術つて。じゃあその呪術つて魔力を制限する呪いつて事？だからサスケの魔力が弱かつたの？？」

「そうだと思う、麻美をここに案内させることを口実にしてマリの本当の目的は「本当に呪術実験は成功に至ったのか」それが知りたかったんだと思う。だから変換を使わせるように仕向けたんだと思つ」

「じゃあなんでサスケが危ないの？」
麻美が聞く。

「呪術実験が成功したんだよ？…サスケにまた術がかけられてもおかしくないじゃない！！」

「そつか…じゃあ花畑にいる時なんで『炎上』を使ったの？？」
の捻じ曲がった不思議な
マンホールがあるのよ、そして魔法のテレポートと同じ効果があるの。
おそらくサスケはそのマンホールの事を知っていたのよ

「サスケはどうに？今どこに居るか分かる？？」

「えっサスケ？？」

「うん、ママの変わりに謝りたい。黒でも白でも私には関係ないよ」

「多分、千年牢獄の下の研究所にいると思ひ。」

「そこに行こう……」

「うん……」

2人は南の方角にある灰色の空をめざして歩き始めた。
しばらく行くと黄色と緑でふちどられた大きな草原が見えてきた。

謎鳥、アーサー登場

「きれいな所だね。」

麻美は縁の草原を指差しながら言つた。

「あれ、私の家なんだよ。」

縁は楽しそうに言つた。

「えつ？！あれ縁の家？？」

「うん、あつそつだ！…黒界に行くまでに私の家によつて行けばいいよ。

だいたい、研究所にどつやつて行くか知らないしさ。」

「えつ！？知らないの？」

「えつああまあ…あつでも私友達に聞いてみると分知つていると思ひから…」

「分かつた、あつがどう…じゃあお邪魔させてもらいます…！」

シャツ、シャツ、シャツと乾いた草原を踏んで森の奥へと進んで行く…

桜の木のアーチをくぐると一軒の小さな家が見えてきた。。

「まあ、ijiの森は私の森なんだけどあれは本家つてところかな」

「へえ。。かわいい家だね」

「ありがとー！」

深い深い縁の草原と周りを取り囲む森林の中にある
縁の家。

木製で屋根に「ケや花が咲いている。

だいぶ昔からあるように思えた。。

家の周りには、小さな小川が流れていた。
種を播いたらばかりのプランターが5つ。かわいらしくレイアウトに麻美はため息をついた

「かわいいねえ、絵本に出でてくる家みたいーー！」

その隣で縁は麻美とは別の方向を見つめていた。

「なにこれ・・・・」

その声は低く悲しくもあり怒りでこもったようにも聞こえた。

「どうしたの？？」

慌てて麻美が縁の方に田をやると縁の草原が枯れている部分がある
のに気がついた。

「どうして、」

縁は枯れている草に近寄り一本一本を優しくなでた。

「うん？これって。」

枯れた草の部分はあるで何物かが縁の家に行くまでの道のりのよう
だった。

「縁、縁の家の中に何かいらっしゃるんじゃないーー？」
なぜか敬語である・・・

「えつー？本当にーー！」

縁は泣きそうな顔で麻美を見た。

「多分、でも、私たちの子だよ？？危ないから警察呼ぼうよ」

「フフフ・・・

縁は涙をふき取ると微笑を浮かべた。

「危なくないよ、私魔術師だもん」

「えつ、でも・・・

縁はスウと手を伸ばした。

「私はねえ、この森の化身だとも町で呼ばれているの。自分で言つ事じゃないんだけどね」

伸ばした手からは複数の縁の葉が紙ふぶきのように舞い落ちた。

その一枚を麻美が取つて見ると本物だという事が分かった。

「『』の力があれば安心でしょーー？」

「だねつーー！」

「中、入るつか・・・

「うん。。」

ガチャリとドアノブを回して奥に入る。

「お邪魔しまーす、、」

少し小声で・・・

玄関先のマットの上に乗るとペチャヤツヒーちゃん音がした。

「何？？」

まだ扉の外に居る縁が一時停止した麻美の体に言った。

「何か踏んだ、」

麻美は首だけを縁に向けて言った。

「何つて、」

縁は麻美の足元を麻美の代わりに見た。

「う、ううつ

縁はとつとつ田を手で覆った。

「えつ？ 何何何！-！-！」

慌てる麻美。

「血だわ・・・」

「ちっちっ血い〜〜！-！-？」

スポンジのようなマットなので踏んだ分その血が床に流れた。

「なんで？？血が？？」

麻美はマットから降りながらひと言った

「見て。・・この血2階に続いている・・・
見るとマットの血は2階に続く階段に続いていた。

「じゃまだ2階にいるとか・・・」

「可能性大ね」

2人は階段を上り始めた。

緑は、ゴクリと唾を飲みながら1つまた1つ階段を上っていく。
麻美は緑の後ろに隠れながら歩く。。

上に上がると突き当たりに1つ部屋があつた。

血はそちらにつながっている・・・。

「行くよ・・・」

緑は、手に汗を握りながら部屋の引き戸をガラツと引いた。
少し引いて中の様子を伺つ・・・。

「どう? ? 何か見える? ?」

麻美は扉から少し離れて尋ねる。

「大丈夫みたいだけどここ私の部屋なんだよね・・・。あつでも血は奥の寝室
につながっているわ・・・。」

緑は引き戸を全開にして中に入り寝室へと向かう。

「えへへ！入るの？！つ もう」

麻美も文句を言いながら中に入る。

「いいよ・・・」

緑は寝室のカーテンに手をやつた。

シヤー！

大きな音を立てた。テンが開く。

明治文庫

「ああっつ！！アーサーじゃない！！どうしたのよーーー！」どうやら縁が知っている相手のようだった。。

ベッドの上せ血だらけで白いベッドシーツも真っ赤に染まっていた。ところどころポタポタと血がしたたりおちる。

その日の落する口に不吉な鳥が
ツバメの如くでいいが

その姿は人形のようになつたりして、息をきらしながら血で染まつた赤い翼をバサバサ動かしていたがそれは力なくかなり弱っていた。

重かしいが力なくがなり弱てていた
血がでているもとを見てみるとお腹に大きな杭のようなものが刺
さつてある

しかもベッドに貫通しているよつでその鳥は串刺し状態。

「痛いんだ……それで暴れて……」

麻美が言う

「アーサー！アーサー！」

縁は気が動転している

緑の呼びかけにもまつたく答えず翼をはためかせそのつど赤い血を流していた。

「やうだ……治さんわや……。」

縁は思い立つたようになり、窓際にあつた植木の葉っぱをブツリと取つた。

その葉を、ギュウッと手で握ると皿をつぶつた。

「縁・・・。」

その姿は真剣だった。

縁の光が手からあふれるとスイと目を開けた。

「わつ麻美！…これ《薬》塗つて！ 血止めだから。」

「うん！…任せて！」

杭の刺さった周りに薬を塗るとアーサーはおとなしくなった。

「クウウウウッ・・・・」

「おとなしくなったよ！…血止まつたし！…」

「良かつた。」

縁はそつと胸に手を当てて皿をつぶるとわざりも眩しい光があふれた。

胸から離した手には緑色に輝く小さな石があった。

「何？それ。」

麻美が聞いた

「魔法石よ。魔法使いなら誰もが一つ持つているわ。麻美も魔術試験に合格すればもらえるわ」

「へええ～で縁はそれで何をするの？？」

「アーサーの傷を治すのよ」

「えつでも、私の擦り傷を治してくれた時はそんなの出さなかつたじゃない！？」

「そうね。麻美の傷はそんなにたいした事なかつたわ。私の力『能力』で治せたわ。

でもアーサーのこの傷を治すには傷が大き過ぎて私の力ではどうにも治せないの」

「じゃ。。禁止魔法つて事？？」

「見つかれば殺されちゃうほど」の禁止魔法ね・・でも今はそんなの関係ない！

アーサーを助けたいの！――

「…………」
縁は魔法石をアーサーの前でかざして呪文を唱え始めた。

すると、パーンとガラスの割れるような音を立てて魔法石が少しかけた。

同時に縁はバタリと倒れ氣を失った。

「緑！ 緑つてば！！！」

肩をたたくが様子は変わらない・・・。

(心を操るマイナードコントロール

ふと、隣のベッドに田をやるとアーサーの姿は見る見る鳥の姿から人間の男の子の姿に変わった。

刺さった杭も無くなり表情も柔らかくなつていいた。

「禁止魔法を使つと石が少しづつ無くなるんだ。

「うひうひうひ . . . 。ビード? ? 」

「アーサーさん? ?

「えつ? なんで俺の名前知つてんの? ?

「いやつそれは。 。」

「あつ! ! ! 緑じやん! おい! 大丈夫か! ! ?

アーサーは倒れてピクリともしない緑にかけよつた。

「さては、おまえがやつたのか? ?

アーサーの目はつりあがり赤い髪を逆立ててこつちをにじみつけている。

「ちつ違います! ! ! 緑があなたの傷を魔石で治して、 、 、

「それは、本当か? ?

「嘘はつかないよ

その後、一階に縁を寝かした。

「どうだ、縁の様子は？？」

「大丈夫みたい、アーサーから貰った薬がよく効いてる」

「そつか。さつきは悪かつたな、疑つてしまつて・・・」

「いいよ、いいよ分かってもらえれば。」

「ありがとう」

「それにして、アーサーの傷見事に完治してるね

「ああ、さうなんだよ。本来魔法で傷を治すのは最大の禁止魔法なんだよ・・・

じつにいるよな？」

「はい

「でも、縁は自分の魔石を使つてまで俺の傷を治してくれた・・・
禁止魔法を使つと魔石がかけるのに・・・」

「じゃあ魔石がなくなつたらどうなるの？？」

「消えて無くなる。消滅するんだ」

「消滅。。」

「ああでも大丈夫だよ・・かけたくらいだったら

「うん、そう言えばアーサーも魔石持っているの？？」

「ああ持つているよ。魔石は魔法使い、魔術師にとつて命のようなものだからな」

「見せてくださいーー！」

「いいよ」

アーサーは縁と同じよつて胸に手を当てて目をとじ呪文を唱えると手を胸から離した。
赤い光がパアと光る。。

「これ、俺の魔石、」

「赤いんですね。とてもきれい」

「そりかな・・」

アーサーは照れた。

「この魔石は無くなつたら消滅＝死だから心臓だと黙つてもいいかな」

「大切ななんですね。とても」

「そう。だから魔石を使うと言つ」とは大変な事なんだ

アーサーはそう言つと赤い魔石をスウと体に直した。
ガタッ・・

二階から大きな音がした。◦

「何？？」

麻美はアーサーの後ろに隠れた・・・。

「ハアハア・・・アーサー大丈夫？？」
縁だ。

「おい！…寝てないとダメじゃないか！…！」

アーサーは立ち上がり縁のそばに駆け寄った。◦

「元気そうね、よかつた・・」

「ああ元氣さ」

「アーサー・・サスケが研究所につれてかれたの。！」

「なんだって！…サスケが？？」

「そつよ。また酷い実験を試されているんだわ」

「君の変わりに俺が行く、だから縁はゆづやすんで……」

「こやか……。」

「だつてお前そんな体じゃ行けないだろつ……！？」

「待つて。」

縁は門を開じた。

「木の芽草の芽よ私に力を。」

そつ言つと縁の表情は柔らかくなつた。

「行くよ……私はもう大丈夫！！」

「何が起つたの？？」

麻美が聞く。

「治癒だよ」

「治癒？？？って傷を治す魔法なんじや……」

「血が出ていれば私には治せる範囲が決まられたくるけど血が出てない場合はほとんど私の能力で治せるわ、」

「治せる範囲つて？？」

「例えばさつきのアーサーの血、あれは、血の出た範囲が20×20、40cm²を超えてしまつと私には治せなくなるの。」

「そりなんだ。。だからアーサーの傷、治せなかつたんだ・・・」

「うん」

「そんなことよりサスケのところに急いでよー」アーサーが言った。

「そうね」

3人は外へ飛び出した。

「そり言えばアーサーはなんで私の家で倒れていたの??」

「ああ。。。戦争さ」

「戦争?・・・まさか・・・」

「戦争?つて何?何のこと?」

麻美が聞く。

「私、麻美に話したことあるわよね?白界と黒界が戦争してて境界
が出来たって・・」

「うん」

「それ、今も続いているのよ・・」

「戦争が？？」

「そりや、それに昔の戦争と違つて科学と色々な技術が進歩しているからね。」

「昔より派手なんだよね。」

「実は俺も戦地へ行つてきたばかりなんだ・・だけど大きな杭の雨が降つてきて、、気がついた時には縁の家の中に居たんだ。」

「だからあんな血を？？」

「今はね色々な技術が発達した白界は黒界を押さえつけようとして昔捕らえた黒魔術師を実験材料として研究、実験がされているのよ。」

「・」

「どんな実験？？」

「簡単に言えば一人の魔術師の自我を破壊してあらゆる記憶と人格を思いのまま操る

心操る魔法 マインコントロール 心呪術コントロールと呪いをかけるものよ。

この実験を成功させるために黒魔術師を使って実験がされているつてわけ・・・」

「・・・それをサスケが。」

「ええ、マインドコントロールの他にも色々とね」

「そうだったんだ、」

「サスケは黒魔術師だったの・・知つているわよね？？」

「うん」

静かにうなづく

「今から6年前、ある日俺たちは戦争に狩り出されたんだ。」

「私、10歳、アーサー10歳だった。」

「小さい頃から黒魔術師は敵だと思っていた。。学校でそう習つたからだ・・
だけど、奴は違つていた。。。」

「サスケの事ね?」

「そう、そして、私たちは10歳で戦争に狩り出された後辛い練習の日々に反抗して牢屋に閉じ込められたの。。
食事も水も出ない地獄のような毎日が続いたわ、もうダメかと覚悟を決めた時だった」

「「おい大丈夫か?」つて小さな声が聞こえたんだ。それがサスケだった」

「サスケは小さなクッキー3枚と赤いりんご1つを差し出してくれた。

「私たちは夢中で食べたわ。サスケが黒だつて言う事も忘れてね。
食べ終わってから

「気づいたんだけどサスケも首と手首に鋼の鎖を携えていたの、サスケも捕まっていたのね」

「その後もサスケは色々持つてきてくれた。」

そして次第に俺たちはサスケについていこう黒魔術師は敵じゃないと思った。』

「だから、私たちはサスケを助けに行くの！」
緑は真剣な顔で言った。

「俺も同じだ」

「私も行くわ、、、！」 麻美が言う。

「おう！ じやあ行くか！ 」

アーサーは呪文を唱え始めた。

「アーサー？」 麻美が言う。

「まあ見てなさいよ」緑は腕を組みながら麻美に語り。

すると、アーサーの体がムクムクと大きくなり麻美の体長の3倍はある大きな青色の鳥に姿を変えた。

「ノイエニイ」

アーサーが叫ぶ。

「なんて言つてるの？」

「乗れって言つてゐるのよ。」緑が言つた。

「分かつた」

麻美はアーサーの大きな翼を手でつかむと勢いをつけて飛び乗った。

「ピピイイイー」

アーサーは翼をはためかせた。

「今なんて言ったの？？」

「行くよって、」

アーサーの体が斜めに傾くと背中に乗った2人は振り落とされそうになつた。

「おっ落ちる！……」

「大丈夫よ！しつかり羽につかまつて！！」

縁が麻美の手を握つて風の強い空を見る。

アーサーは一気に急上昇した。

「すうい、スピード……」

だんだん麻美たちのいた森が小さくなつていぐ。

「ピィイー」

「もう大丈夫だつて……」縁が言つ。

「本当？」

目をつぶっていた麻美は目を開ける。

「うわあああ、空広いねえ気持ちいいーー！」

頬にあたる風がほんのり温かく眠氣を誘ひつ。

すると、だんだん空の色が重い灰色になつてきた。

進入！黒の実験所

さつきのカラリと晴れた青い空とは大違ひだ。

「もうすぐつくわ黒界にね。」^{じょく}緑が言った。

「ねえ緑、」

「何？」

「あの空に浮かんでいる建物は千年牢獄なんでしょう？？」

「そうよ、サスケもあそこから来たの」

「サスケは、なぜ実験台に使われたの？？サスケの他にも牢獄のな
かじや沢山いるんじや

ないの？実験を行っているのはサスケだけなのはなんで？」

「能力の大きさよ、」

「能力の大きさ？？」

「ええサスケは私たちと同じ年齢に見えるけど本当は、400年前
に生まれているの」

「どう言つ」と？

「時間が止まっているの」

「どうして……？」

「私にも良く分からぬけどあの千年牢獄に入つてると自然に
時永止術ときえいじゆ
と言ひ呪いがかけられるそうだわ」

「時永止術……」

「そもそも、なんでサスケが捕まつて牢獄に400年も入れられて
いたかって言ひと
能力（魔力）が他の黒魔術師と比べてどんなでもなく強かつたからな
の……

魔法戦争をしていた両国は最初は黒界が勝っていたの。だけど白界
が勝つた。

それは、白界が戦つていた黒魔術師に「永眠」と言ひ眠らせる魔法
を使つたから勝てたらしいわ。

サスケも戦争に出ていたのね。2歳だつたつて聞いたわ。力が強
かつた事と親が居なかつた
ことなんかがあつて出されていたみたい……

「2歳つて……」麻美が言ひ。

「でね、サスケが捕まつた後、サスケの能力の強さを知つた研究員
はどんな強く厳しい実験にでもこいつなら耐えられるんじやないか
？つて思つたらしいわ。

そして予想は的中、サスケはどんな実験でも耐えたらしい。
今では、サスケは、マリの言いなりになつてているの……何故か分か
らないけど。

また、別の呪術をかけられたのかもしけれない……

「でも、黒界に行けば何か分かるかもしないね！」

「そうだね！！」

「猿の手」

「着いたわ」

アーサーは急降下をし始めた。

空に浮かんでいる建物が近く見えてきた。

アーサーの足がズシツと地面に着いたのを確認すると2人はアーサーから飛び降りた。

「やつとついたか。」アーサーは人間の姿に変わっていた。いつの間にか・・・

「ここが研究所、」

研究所は灰色と言つよりも黒に近い色の建物で氣味が悪い。研究所のすぐ上には黒色の大きな建物が浮かんでいる。

「あれが千年牢獄か・・・」

「そんな事より研究所入りましょ！…きつとサスケはあの中よ…」
緑が研究所のドアノブに手を置いた。

「ガチャガチャ・・・」
ドアノブが空回りした。

「開かない。鍵がかかっている・・・」

「じゃあ中に入れないじゃん」
麻美が言つ。

「どこか開いているところがないか探してみよっ!」

「そうね」

数分後、開いていた窓が見つかった。
ガラスが割れあちこちに破片が散らばっている。

「ケガしないように中に入ろう!」

「わかつたわ」

「オッケイ!」

3人は少しずつ足をかけ中へ入った。

入った先はトイレだつたらしくタイルの冷たい音がコツンとなつた。

「うわー、トイレじゃん!! しかも、うえつー女子トイレじゃーーー!」

「しーーーーアーサーちょっとひるむわこよーーー!」

「やうだよー静かにしなきや見つかっちゃうよーーー!」

「「」めん、 、 」

トイレの戸を開けながら周りを確認する。

「誰もいないわ」 縁が言つ。

縁は一步ずつ歩きトイレからでた。

2人も縁に続く。

バタン！…………！

トイレの戸が大きな音をたてて閉まった。

「アーサー…………静かに閉めてよ…………！」
縁と麻美は口を揃えてアーサーに言つた。

「すんません…………」

アーサーは即謝つた。

そんな事もあり3人は順調にまっすぐ伸びる長い廊下を行く。
すると一番奥の部屋がうつすら光つているのを発見した。

「ねえ、あの部屋ちょっと怪しくない？」先頭に立った縁が言つ。

「確かに……」 麻美が言つ。

「ちよっとのぞいてみよつぜい……」アーサーは扉の近くに立つ。

2人もアーサーに続く。。

キイ・・・・少し戸を引くと広大な実験所が広がっていた。

「サスケは？？！サスケいる？？」

3人はしきりに首を動かしサスケを探した。。

「あつ！……居た！」アーサーが言つ。

「声でかいよ！……！」縁はアーサーを押し付けアーサーの指差す方に目をやつた。

「ああつつつ・・・・・」縁は声を詰まらせた。。

サスケは天井につながる長い鎖を両手につながれ膝をつき見るからにぐつたりしていた。

どうやら氣を失っているようだ。

「サスケっ！」縁が小さな声で言つた。

鎖でつながれたサスケの前には白衣を着た女性が1人サスケを見ていた。

「あつ！ママ！」麻美の母、マリであった。

マリの後ろには総勢20人ほどの白衣を着た研究員が立っていた。どの人の視線もサスケのほうに向いている。しかし、サスケはピクリとも動かない。

「実験は成功したのか？？」研究員が言つ。

「そのようです。」資料を持った女の研究員が言つ。

「やつと、成功したのか。これでまた新しい可能性が見開けてきたぞ・・」

「そうですね。私たちが住みやすい世界にするには、黒魔術師を消す・・

そこにいるのは誰ですか！？！」

マリが静かに言った。

「やばつー見つかった！！」 緑が言つ

「ビツビツするーー」 アーサーが言つ。

「ジンジン」とヒールの音が聞こえる。その音は次第に大きくなってきた。。

「もつもうだめっーーーー」 麻美が思つたその時だった。

薄暗い光が3人を包んだ。

「何々！？！」

「ああつー」 緑は言つた。。

「どうしたの？？」んな時に！？」

「ねえ見て、アーサー、麻美・・」

緑はさつきまで覗いていたすきまを指差した。
2人は緑の言つよつに隙間を覗いた。

「あつ！サスケつ」

3人は驚いた。。

マリがこっちに近づいてくる。

なんだろ? 他の研究員もみんなこっちに気を取られている。

さつきまで氣を失いぐつたりしていたはず……

サスケは研究員とマリの目を盗んでいたのだ。
こっちを向いて鋼の鎖のついた重い手を氣づかれないように少し上げて術をかけている。

サスケはこっちを見てニタリと笑うと、一瞬目が赤く光った。

3人を包む光も激しくなった。

「ここは……」

激しい光に包まれて思わず目をつむつて開けた瞬間、そこは研究所の裏手にある森にいた。

「何だつたんだ??」アーサーがいう。

「まさか。サスケが?」麻美が言つ。

「でも、サスケって瞬間移動使えないんじや……」アーサーが言つ。

「だけど見たでしよう？？サスケが術使つていたじゃない？！」

「だよな。瞬間移動は黒魔術師にしか使えない術だしな。
やつぱり、サスケが・・・・？？」

「でもさあマリは麻美の入学式の時サスケを試したんでしょう？も
うどうなつているの？」

ドッカ――ン！――！――！

「何何何何！――？」

研究所から大きな爆発音が聞こえた。

丁度サスケが居た部屋からだ。大きな煙が上がっている。

「ねえ！サスケになんかあつたんじゃない？！」心配そうに縁が言
う。

「早く行こう！――今なら煙に紛れて助けるかもしれない！」アーサーが言つ。

「行こう！」3人は立ち上がり研究所に向けて走り出した。

「ちょっと待つて・・・」

背後からきれいな女性の声が聞こえた。

3人はびっくりして立ち止まり同時に振り返る。

そこには赤茶色の長いウェーブのかかった髪をなびかせ大きなイヤ
リングをしている

女性が立っている。

「黒の実験所に子供が入るなんて危ないと思わないの？？」女が言った。

「あなたはもしかして……」縁が知っている人物のようだ。

マリア脱獄計画

「マニアさんですか？？」 緑が言った。

「マニアさん？？って誰ですか？」 麻美が言った。

「え～麻美マリアさん知らないの？」

「うん。。」

「うひゅ～マニアさんとても有名な人物らしい。」

「そんなんに有名なんだ。。。」

麻美はマリアの方をチラリと見た。

「あなた、人間界の子ね？」 マリアが言った。

「はい。。」

「ありがとうございますー！」 マリアはこいつこいつ笑つて言った。

「ありがとうございますー！」

麻美は顔を赤らめた。

「マリアさんも黒の研究所へ？？」 緑が聞く。

「ええ、サスケがここに居るわけじゃない？だから一週間前からこの付近を探索していたの」

「一週間も前からですか・・・」「アーサーが聞く。

「IJの実験室の状況と構造、警備員の数、調べる事は山ほどあるわ。」

「ちすがですね！…マリアさん…！」麻美が言ひ。

「まあね、あんたたちと一緒に実験所行きたいと思つても…一週間前からここに来る」とは知つていたし・・

「知つていたってどういつひつ」とですか？？」「麻美が聞く。

「マコアさんはね」「未来視」「って言つ魔術が使えるのよ

「未来視ですか。どんな魔術なんですか？」

「読んで字の」と未来の事つまりこれから起つことが見えるのマリアは鼻を高くしていった。

「マコアさんはこの魔術習得の為に何百年も前から練習されているの」

「何百年も前からってどういつひつ」とですか？

麻美が聞くとマリアは手首を見せた。

「なんですか。 。 」れ・・

「黒魔術師が千年牢獄に入つていた証拠なの。 。 」

マリアの手首にはM・Mと書かれた入れ墨と

良く分からぬマークがあつた、

「Jのマークどいかでみたよつな・・・」 麻美が言つ。

「サスケの『一』の背中についているだろ?」 アーサーが言つた。

「あつそつ言えばーーーつかマリアさんはなんでサスケを助けに来たんですか?」

「弟だから・・・」

マリアは静かに言つた。

「弟? ? 弟なんですか? ! 初耳です! 」 緑が言つ。

「本当なんですか?」 アーサーが言つ。

「本当よ。」マリアが言ひ。

「弟ってことはマリアさんも黒魔術師なんですか？？」縁が言ひ。

「元黒魔術師ね」マリアは笑いながら言ひた。

「?????」3人は不思議に思った。

「あれは今から500年前の事・・幼い私は魔法戦争に巻き込まれ
当時完成した

この千年牢獄に入れられた。

そこは、光も無くまさに闇だった。

私が牢獄に入つてから少し経つてから幼い男の子が入れられたの。

それがサスケだった。

私とサスケはすぐに仲良くなつて行動を共にするよになつた。

当時私は4歳、サスケは2歳。

小さかつたから姉と弟の関係に自然となつていつた。

サスケは私を本当の姉のように慕ってくれた。私もサスケを本当の弟のようにかわいがった。

私たちが入ったばかりの牢獄には 時間停止装置^{タイムストップ}がついていなかつたから

私たち2人は闇の中で育つた。

顔も見た事なかつたけど私はサスケの優しい声を聞くと元気が出た。闇の中だけれど私は幸せだった。

だけど事件が起きた。

私が18歳、サスケ16の時だった。。

時間停止装置^{タイムストップ}が開発され千年牢獄に導入されたの。私たちの人生の時間が止まつた瞬間だつたわ・・・。

それは黒魔術師を使った広大な実験をするため、死なないようになると
言う意味があつたらしい。

時間停止装置、それは時永止術^{ときえいじゅつ}って言う呪いをかける装置の事でね
魔法使いの手で術をかけたら2年かかる魔術なの。

それが、何秒つて言うスピードでかけるられるようになった・・・

私は冗談じゃ無い！つて思つたわ。

そして、強くここから出たい！出ないと！つて思つた。

2人で・・

そして思いついた。。

ここから出る方法・・・。

伝説の魔術師メイリーンが成功させたと言われている伝説の魔法
『未来視』『過去視』これを成功させて闇の中で有名になればここから出られる。

そう思ったの。

だけど成功条件はとても厳しかった。

私は毎日血のにじむような努力をした・・。
サスケも応援してくれたわ。

だけど成功の兆しはまったく見えなかつた。

サスケも応援してくれていろんなことにつき合わせたからだつたのかな

風邪を引いたらやつてね。高熱だつた・・40度を超えるほどいのね。

不思議だつた・・

サスケが風邪を引いてから私の日は今までと違つものが見えぬようになつていたの

「未来視」の成功だつた。。

そして、私が「未来視」を成功させた事を大げさに言い散らかしていると
予想どうり外に出れることが許された。

だけど想定外だつた。

外に出られても私はちつとも嬉しくなかつたから
サスケをおいてでの釈放。。

「必ず戻つてくるからね・・

そう言つたけど2度とそこに帰ることはなかつた・・。

私が外に出てから知つたんだけど、あの後研究員はサスケの能力の強さを知つて

サスケを中心とする実験が行われたらしいわ。。

何回も何万回も・・・・・、

私は未来視の出来る黒魔術師、、

白界からは私を白界に入れたいと言つてきたわ。
もちろん私は嫌だつた。。

だけど私の言い分なんて無視して3日も続く大きな実験が行われた、

黒魔術師を白魔術師にする実験・・

成功例が無かつた実験だったからみんな心配そうだったけど見事に成功した。

だけど今は黒魔術師に戻りたいって言つ本能みたいなのが出てくるようになつて・・・
とても苦しい。。

サスケにもこんな味あわせたくないのツツー・

3人は再び立ち上がつた。

「行きましょーーー！」マリアさん！－」 麻美が言つ。

「わづねー・

4人は扉の前に立つた。

黒の実験所の正面ゲートだ

中はすごい煙が立ち込めていた

ドンッ！－！

もうい扉をアーサーが足で蹴飛ばすと真っ黒い煙が一斉に外に飛び出した。

「ゲホっ・・

口に手を押さえ中に入つていぐ。5分ぐらい歩くとじわりその部屋
が見えてきた。

さつきと違つて戸が全開である。

研究員が逃げ出したんだろう・・・

「しめたッ！」

4人は煙をかき分けて中に入った。

倒れて居る。

「サスケっ！・・・」マリアは駆け寄る。
肩を揺するが応答は無い。

「サスケ！・・・」

「大丈夫？？」

後の3人も駆け寄った。

「とにかくここからでよう！・・・」

アーサーは言つた。

「まつて・・・」

行こうとするみんなをマリアが止めた。

「なんすか？」

「そのまま行くと別室に居る研究員に見つかってしまうわ」

「未来視ですか？」縁が言つ。

「マコアさんの『いつの間にか』の方が多いでしょ。うなぎだったらどうしてこんなこと言ひ

人てすが」

「それは……」「

そのときだつた。

立つていられないほどの突風が吹いた。

「何？？」

「ノーバー！」

上を向くと部屋いつぱいに翼をはためかせた大きな鳥が居た。

青い鳥。

翼

鳥

「アーサー？」

「そつか」の窓をぶち破つて外に逃げれば、なんとかなるんじゃない？？！」縁が言つ。

「それっ！ありかも……」

「そうと決まればさつさと行きましょ……」
マリアはサスケをおぶつた。

3人はアーサーに飛び乗った。

「ピピイイイ——」

アーサーがばさりと翼を仰ぐと部屋全部の窓ガラスが割れた。

「今よ……」縁がアーサーにエールを送る。。

「ピピイイイ——」

割れたガラスをくぐつて外に飛んだ。

影が動く「影写」の術（前書き）

評価をお願いします。
アドバイスや意見、感想などなんでも
書いてください。

影が動く「影写」の術

黒い空が明るくなつてきた。
黒い空が小さくなつてきた。

青、、

大きな空

「サスケは？？」 麻美が言う。

アーサーの大きな背中の中マリアはサスケを見ていた。

「分からない。意識はないわ」

ウェーブのかかった長い髪を耳にかけながら言ひ。

大きな青い空

純白の雲に瑠璃色の青い空

いつの間にか白界に入っているようだ。

「アーサー！私の森に行つて！！」
向こうの方に緑の森が見えてきた。

「ぴぴぴい！」

森の真下まで来るトアーサーは地面に吹き飛ばしをかけた。
次第に地面が見えてきた。

アーサーの脚がズシツと地面に着くとみんなは一斉に飛び降りた。

「ピュイ」

皆が降りたのを確認するとアーサーは金色の光に包まれた。

一瞬だつた。

次の瞬間はもう人間の姿に変わっていた。

アーサーは緑の家に向かつて走り越して玄関に向かつた。

「オレ、玄関の戸開けるわ」

「ありがと」

サスケを負ふつたマリアが言つ。

玄関を開けてマリアの先に入ったのは緑と麻美だった。

「私ベッドの準備してくるねッ！」

緑が言つ。

緑は2階の寝室に急ぐ。

「私は」飯の準備するつー・・・アーサーも後で台所に来てね

「おひおひ」

アーサーは玄関の戸が閉まらないように持ちながら返事した。

その間マリアは負ふつたサスケと中に入った。

玄関マットを踏んで2階へと続く階段を上つて行く。

相変わらずサスケの意識は無い。

「ソノに寝かせてください

部屋に着いたマリアは縁の脇によろけてサスケを寝かした。

と同時にマリアは近くにあつたイスに座り込む。。

「疲れましたが、マリアさん・??.」サスケに布団をかけながら聞く。

「まあ、1週間実験所に張り込んでいたからね、でもサスケに会えて本当に良かった。」

「そうですね、でも、意識が。」

「そうなのよね

小さな寝室のカーテンがヒラリとなびく、

3人の居る部屋をほんのちょっと涼しくした。

寝ているサスケのキャラメル色の髪がゆっくりなびく。

「ドンドンドンドンドン・・・・・

下から誰かが上つてくる音が聞こえた。

その音はどんどん大きくなつてくる。

寝室の扉が開くと、黄色い鍋の底に真っ黒になつた物体が2人の目に飛び込んできた。

鍋のあとから2人の顔が・・・

「ゴメン縁・・カレー作ろうと思つたんだけどさ、
アーサーがちゃんと火見てなくて、焦がしちやつた・・・」

「オレのせいかよッ！…あればお前が悪いんだろうがよー。」

「私はにんじん切つっていたんだもん！… アーサーが一番近くにいたのに

見てないから悪いんだよッ！…」

「いやいやいや…お前にも責任あるとおもつけどな…！」

「いいわよ鍋ぐらー！…」
縁が言つ。

喧嘩けんかしていた2人は縁の声を聞いて泣いているマリアの方に

田をやつた。

「サスケ、、、」
アーサーが言ひ。

「サスケ・・・」 麻美はサスケに駆け寄る。

ベッドの近くに膝をつきサスケの手を握った。

「?????？」

麻美は驚いた。

手

黒い手袋

握る

「冷たい」

麻美はとつぞにサスケのおでこを触った。

「氷みたい、、なんで？！サスケ・・死んでいるの？？」

「死んでいないわ」マリアが下を向きながら言つ。

「じゃあどうして・・？」

部屋の入り口に立っていたアーサーが麻美に近づく。こげた黄色い鍋を窓辺のチョストに置いて。

「うひち来いよ」

アーサーは呆然とする麻美の手を引く。

寝ているサスケの布団をめくつて「一トの下を指指した。

「うう」

「何？」

アーサーは麻美の手をサスケの胸の上に置いた。

「これで分かるだろ？！」

「えつ？！」

麻美は最初はアーサーが何を言っているのか分からなかつた。だが、すぐに分かつた。

「音が・・・しない」

「呪術実験の時、心臓・・・抜かれている見たいなのよ、実験の副作用がでないようについて・・・ハハハ」

マリアが氣力なさげな声で言つた。

「これが呪術実験の力なのよ。身も心もサスケは・・・」

怒り狂つた声で緑は泣きながら言つた。

麻美も目に涙をためてサスケに布団をかぶせた。

うう・・・

「大丈夫だよ姉えさん・・・」
サスケはうつすら目を開け喋つた。

「サスケッ！！！大丈夫？？」
マリアがサスケの顔を覗きこむ。

同時に麻美とアーサー、緑が駆け寄る。

「暑い・・・もう大丈夫」

「本当によかつた。」

「そんな事より姉えさん・・外」

「ええ、来ているみたいね・・あなたを狙っているの？？」

「多分ね」

そう言うとサスケは立ち上がり壁にかかつた大きな包みを背中に背負つて立ち上がった。

「サスケ？？どこ行くの？」

緑が聞く。

「大丈夫、すぐ片付けてくるから。

目が焼けるから4分外見るのやめてもらえない？？」

「分かったわ。」

マリアが言うとカーーテンと窓を閉めた。

「ありがとう」

そつとサスケは部屋を出て行った。

「なぜ、外を見ると田が焼けちゃうんですか？？」

麻美が聞く。

「ここは田界。サスケのように魔力が広大で使える術も多彩ならば私たちの身体に大きく影響を及ぼすものも無いわけではないのよ。その身体に影響を及ぼす魔術の事を【白界の禁止魔法】と呼ばれているの。今、サスケが使おうとしている魔術はまさに【白界の禁止魔法】なのよ」

ゴクリと唾を飲む。

「でもさ、見るなって言われると見たくなりよね」

縁がニヤリと笑った。

「それはやうだけど、私、田が焼けるのいやだなー」

麻美が言つ。

「そんなのただの名神だよ、ちよつとならいいんじゃない？？」

「ダメだよーー！」

「いいじゃん気になるじゃんーねつマコアさんーー。」

「えつええつーー？」

全員が賛成した。

カーテンのすきまから一いつと覗く。
眩しい光が見えた。

「目が焼けるつ！――！」

「オレに任して下さい！――！」

アーサーは片手を外に向けてかざした。

「光壁」
〔バリアー〕

アーサーは目に入つてくる光を遮つた。

「ありがとうアーサー」麻美を最初に縁、マリアがアーサーにお礼
を言つ。

「いや～これくらい何でも！」

アーサーは若干照れ氣味だつた。

「ねえみて。サスケだわ」

「光壁」の中から外を見るとサスケがなにやら追つ払つているよう
に

術を使つてゐるのが見えた。「

「サスケを迎えて来たんだわ」

「えつ？！」

空に浮かんでいるのはU.F. のような物体だった。
結構な数だ。

「迎えて来たって実験所からですか？？」

「そうだと思つ。」

しかし、外に居るサスケはいたって冷静だった。

その時、U.F. から赤色の光線ビームがサスケを直撃した。
サスケは、バタリと倒れる。

「サスケツッ！？」 麻美が叫ぶ。

「大丈夫よ。見てごらん」

麻美は鼻をすすりながら、外を覗くとサスケは目をちゃんと開けて
いた。
真剣そうだ。

時間がたつのを待っているかのように・・・。

「サスケ、何をしようとしているのかな？？」

すると、今まで宙を舞っていたU.F. が地上に降りてきた。

サスケは、ピクリとも動かない。

半分以上宙に居るローフ　から太い鎖がサスケを巻きつけた。

「大丈夫じゃないじゃない？！サスケが連れて行かれようとしているんだよ？？」

「サスケ～～～！」

皆、思いもよらぬ展開に呆然と空を見上げた。

鎖に縛られたサスケは、黒い空のかなたへと連れて行かれた。見えるサスケがだんだん小さくなつていいく・・・・・。

「姉えさん」

「サスケ？？」

マリアが呼ばれる声に振り向くと、かなたへと連れて行かれたはずのサスケがベッドに座っていた。

「何言っているんですかマリアさん！！サスケは空のかなたに連れて行かれたんですよ？？」

現に今あそこにいるじゃないですか？！つてあれ・・・？」

「サスケが2人？？」

全員が混乱した。

「あれほど見ないでよって言ったのに・・・」

「サスケ？？なんで2人？！」 麻美が聞く。

「ああ。あれか・・・」

サスケは不思議そうに空を見ながら言つ麻美やアーサーを可笑しく
思いながら言つ。

「ほら、僕の足元」

サスケの言つ通り皆はサスケの足元に目をやつた。

カーテンの隙間すきまから夕日の光がキラリと差し込んだ。

「眩しつ！――」

麻美が言つ。

サスケ以外の誰にも黒く細長い影ができた。

それは、常識。当然のことだ。

だが・・・

にやりと笑いながら立ち上がったサスケを見るとあるはずの影が無
かつた。

「『影写』^{えいじょ} って言つ魔術でね。本当に演術時に発生する光で目が焼

けてしまつ

魔法なんだ。

僕の方を見ている事に早く気づいて良かつたよ

「『めんなさい』……私も調子に乗って。。」

マリアが謝る。

「オレも・・・」

「私も・・・」

「『めんなさい』

「特に『影写』は魔界でも恐れられている3大魔法の一つだしね。」

「3大魔法って??」

「影を自分の分身にして動かす事のできる魔法【影写】

何もかもの時間を瞬時に止められる呪い魔法【時永止術】

そのものの自我を破壊して心を意のままに操る呪い魔法【心術】

この3つが魔界で禁止されている魔法なの」 マリアが言う。

「でも、サスケは、さつき『影写』を使ったよね?それっていけない事なんじや・・・」

「大丈夫よ。魔界で・・・なんて言う大げさな名称が付いているけどこれは、全て白界で禁止されている魔法だもの。

サスケは黒魔術師、影響あるのはむしろ私たちの方なんだから！」

「でも、今度から気をつけてくれよな。本当危ないんだからさ」

「うん」

「でもさ、「影写」ってなんで禁止魔法なんですか??私にはそうは思いませんけど・・・」

縁がマリアに聞いた。

「影つてその物があるから出来る物でしょ?影が無くなつたら、その物は最初から無い
つて事になるじゃない?結果、消えちゃうんだよね・・・」

「所要時間は1時間、それまでに自分の影を戻さないと消えてしま
うんだ。」

「当時はこの魔術を許可されていた時代もあつたらしいが、
所要時間を守る事が出来なかつた人が多く、禁止されたんだ。」
アーサーが呟つ。

「へへへ」

その時ガチャッと部屋の扉が大きく開いた。
皆がそちらを見る。

「お帰り、『ごくろうだつたね』
サスケは静かに呟つ。

そこには真っ黒のサスケが立っていた。

「影だよ
縁が言つ。

黒いサスケはサスケの後ろに立っていつまで無かつたサスケの影
が出来た。

「さつ早くここから出よう、僕が影だったことをやめよう気づかれ
ているはずだ。」

君たちの命も危ない。

「やうね、行きましょう……」マイアが言つ。

「わかった！…」

「やつと決まれば急がなきや」

皆は、家中の必要だと想つものを集めに向かった。

空はすっかり深い深い藍色になっていた。

カラスは鳴くのを止め、金色の星と黄金色の月が辺りを明るく照
らした頃だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1582e/>

魔法使いサスケと 空をよぐ金魚

2010年10月9日01時33分発行